

英語分詞構文の教授法に関する一考察*

濱崎 大**

Considering Teaching Methods and Techniques of English Participial Construction

Dai HAMASAKI **

キーワード：英語教授法、量的学習と質的学習、省略

1. はじめに

本論では分詞構文の教授法を軸に、英語の学習に勤しむ対象に、量的学習から質的学習への転換を促すことができるような教授法を考察する。確かに、外国語を学ぶ際には反復や暗記に頼らなければならない側面があることも事実であるが、そういった量的学習の中で、その負担に耐えられず学習意欲が削がれてしまう傾向があることは否めない。大学入試の見直しも進む今、語学学習のみならず「覚える」学習から「考える」学習へ導く重要性もあげられている。本質的に外国語に対してネガティブなイメージを持つ学習者はさておき、ポジティブなイメージを持っている学習者に対して、その意欲を指導の中で削いでしまうような事態は避けなければならない。特に指導の中で気をつけなければならないことは、これから学ぶことに対してポジティブな姿勢が取れるように行う「最初の解説」にあると考える。ここでは分詞構文、特に従属接続詞を用いてパラフレーズするタイプの教授法に焦点をあてながら、省略の「基本的な考え方」をまず理解することでその情報量を減らし、効果的にこの構文を理解、ここでは作文レベルへと導けるような方法を考えていく。また、ここで考える指導の対象は、はじめて、あるいはそれに近いレベルで分詞構文に触れる学習者（以下、初級レベル学習者と表記）に対して行う指導について考え、ある程度の知識を持つ学習者に対して行うより深い指導については稿を改めて考えるようにしたい。

2. 初級レベル学習者への導入と課題

基本的に分詞構文は、口語表現ではあまり使用されない傾向にあるが、文語表現においては使用頻度が高く、英語文学といった人によってはあま

り触れる機会の少ないものでなくとも、この構文を目にすることは多々ある。故に、リーディングやライティングの指導においてこの構文がさほど重要なものではないとは言い難い。しかしながら、初級レベル学習者の指導にあたる際には、どの程度まで深い指導をしていけばよいのか、指導対象の理解力や指導時間の折り合いなど、様々な条件のもとで有効な方法を模索する状況に直面してしまう指導者は少なくないであろう。この章では、まずそういった学習者に対して行われている最初の解説の現状と、その課題をまとめてみたい。

2.1 典型的な最初の解説

初級レベルの学習者向けの教科書や参考書において、分詞構文の解説に入る際の説明は、「接続詞+SV」のしっかりとした副詞節だったものを、副詞句にかえるというものが多し。副詞句に置き換える方法として、接続詞と主語を省略し、動詞を現在分詞にかえるというものである。特に従属接続詞を用いてパラフレーズする際には、「時」、「理由」、「条件」、「譲歩」を表す接続詞を省略するとある。その後の解説の展開は多岐に渡るものがあるが、解説に入る切り口は、同様の説明が多く典型的な最初の解説と考えるとよい。

2.2 分詞構文と量的学習

分詞構文に限らず、初級レベルの学習者に対して様々な英文法の解説に入る際に行われている指導は、その形や用法から始めることが多い。このような指導はむしろ避けるべきものではないが、学習者にとっては「覚えなければならない」情報が増える、そういった印象を与えかねない。例えば不定詞の解説に入る際にはその形、つまりtoの後に動詞の原形をおき、名詞的、形容詞的、副詞的に扱うことができる旨を解説する。そして、その例文に触れてライティングレベルまでの理解につなげるような指導が行われている。認知言語学

* Received December 19, 2018

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 Faculty of Contemporary Social Studies Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 850-0092, Japan

が指導の中でも応用されている昨今、toがもつコアイメージ、到達点まで意識されていることを指導の中に取り入れ、例えばto studyがもつ意味がstudyに向かっていくイメージ、未来的な含みや不確定な含みをもつ（江藤, 2015, 93）イメージであることを解説する方法も最近ではよく見かける。作文では、「適時」に文法を使い分ける必要があるため、このような汎用性が高く「理解させる」指導は初級レベルの学習者においても有効であろう。しかしながら、形や用法を単に紹介し「積み上げ式」に情報がでてくれば、その情報に対して「覚える」という意識が働いてしまう。まず大切なことは、これらの情報に対して「覚えなければならぬ」という事態が生じることを軽減してあげることである。教科書や参考書では、名詞的、形容詞的、副詞的用法をそれぞれ解説し、そしてそれらを見分けるような問題も多く見られるが、そういった量的学習を課す前に、「考える」学習ができるように導くことが重要である。実際に大学の講義で不定詞の解説を行う必要があるケースで、「不定詞ってなんだっけ？」と発問してみると、toの後に動詞の原形をおくという答えはよくかえってくるが、用法に関しては「忘れてしまった」、「覚えていない」といった返事が返ってくるのが多く見られる。またそういった経験をしてきた指導者も多いのではないだろうか。英語の基本的な品詞は日本語ほど多くはなく、「名詞」、「動詞」、「形容詞」、「副詞」の4つをしっかりと押さえることが優先されている。多くの参考書でもこれらの品詞の解説が序盤に行われているのを見ても、その後の様々な文法解説をスムーズに行える利点があるからであろう。それならばこの利点をいかし、動詞にtoをつけることで基本的な他の品詞に変えることができる解説を最初に行うべきである。

基本的な品詞

「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」

「to+動詞」⇒他の主な品詞、つまり「名詞、形容詞、副詞」にかえることができる。

そしてそれは表現を豊かにする用法、つまりひとつの動詞にtoをつけるだけで、他の品詞に転じることができるため、掛け算式に表現力を増やすことができる用法であることをはじめに行えば、3つの用法を「覚えて」習得するようなものではないことを伝えることができる。そうすること

で、まず不定詞の各用法を「覚える」作業は少なくとも軽減でき、また学習者に対して、あらかじめそれら4つの品詞を自発的に確認する場も提供することができるのではないだろうか。

分詞構文において初級レベル学習者に対して最初に行われている解説の傾向については先に触れた。ここであげる課題は、先にあげた不定詞のように、その形や用法から始めてしまい量的な学習を強いてしまうことがありえるということである。一般的な解説としては段階的に3つのステップを「覚えよう」といった形で解説が進む場合が多い。例えば、

When one of my friends saw me, he ran away.

このようなwhenを使った副詞節を分詞構文に変える場合、まず接続詞を省略、そして主節の主語と従属節の主語が一致する場合は主語も省略する。

①When one of my friends saw me, he ran away.

②When one of my friends saw me, he ran away.

最後に従属節の動詞sawを現在分詞seeingに変えて完成させる。

③Seeing me, one of my friends ran away.

こういった解説を最初に行い、その後の展開は様々な指導が行われている。従属節が進行形や、受け身の場合、主節と従属節の主語や時制が異なる場合など、情報を積み上げながら「覚える作業」を増やし、そして作文を行わせる。むろん、こういった最初の解説から積み上げていく指導に問題があるわけではないのだが、学習者に「覚えなければならぬ」という負担をかけている点は用心しなければならない。

3. 量的学習を質的学習へと導く

これまでは初級レベルの学習者に対して分詞構文の解説、特に最初に行う説明の一般的な傾向を見てきた。ここでは「覚える」ことをできるだけ減らすために「省略の基本的な考え方」を最初に説明することをあげていきたい。

3.1 省略の基本的な考え方

言語学が様々な形で展開され、研究者の間で進む議論をわかりやすく落とし込み指導する環境はますます増えてきている。このような指導の状況をここでも活用したい。ここであげる「省略の基本的な考え方」を説明することは、言語学上の理論を直接学習者に与えていくという訳ではなく、教授する指導者が「省略」の理論を咀嚼して指導することである。テキスト言語学においては「省略 (ellipsis)」のことを、結束性を具体化する方法としている。つまり、これは文の集まりがひとつのまとまりある内容になるよう、そのつながりを「示す」方法として考えられている。分詞構文においては、先にあげた例文のように文の集まりとまではいえないところであるが、まずこの構文を理解してもらうには、「省略」がつながりを「示す」ひとつの方法であるという認識を持たせることは学習者を質的学習へ導く鍵となる。

3.2 導入時の解説「省略の基本的な考え方」

「省略の基本的な考え方」の解説とは、先にあげたように言語学上の理論を直接与えるというよりも、初級レベルの学習者に対してわかりやすいことばでその考え方を説明することにある。その説明を分詞構文の解説の最初に加えることで、その形や用法を解説する際に起こる「覚える」作業が軽減できる。これは2.2でもあげたように不定詞の解説でその用法、つまり名詞的・形容詞的・副詞的用法を最初に紹介して解説を展開してしまうと「覚える」情報として捉えられてしまう可能性が強くなり、その用法を忘れてしまうと自分で引き出せなくなる。その結果、再度教科書や参考書を確認し、暗記や反復による学生の負担を増やしてしまう。このような状況を、最初に行う解説で回避できることを考察した。分詞構文においても、まずはその作り方をいきなり解説するよりも「省略」を最初に理解してもらうことが重要である。

まず英語においては一般的なレベルで、繰り返しになる表現や、文脈などから伝えたい情報が相手に伝わると判断できるとそのような情報を「省略」することが多い。小野は英語のひとつの特徴として、フランス語やドイツ語とは違い、省略現象が多いと述べている。(2015, 120) 周知の通り、日本語でもこの現象は多く、その意味でも「省略」の考え方は学習者にとっては受け入れやすいだろう。尹は省略の現象について以下のように

にも述べている。

言語によるコミュニケーションには様々な要因が関わると考えられるが、普遍的なものとして、ある種の経済的動機が働くことは確かだろう。即ち、言語行動における労力の消耗を抑えるという思考は、最小の労力で最大の情報を伝えるという「効率のよい情報伝達」につながるが、基本的に次の二つの方向で実現できる。一つは単純に話の長さを減らすことであり、もう一つは言語単位あたりの情報を増やすことである。(2016, 122)

つまり「省略」が経済性、ここでは労力の消耗を抑え効率のよい情報伝達ができる効果があるとしてあげられており、また省略された分のスペースを他の情報をあげるために有効に利用できることもその効果としてあげられている。新聞などの限られたスペースにおいて、最大限の情報を伝えたい際には非常に効果的な方法だといえる。このような考え方を、まずシンプルに教授する方法として、「省略の基本的な考え方」を以下のように2つにわけてみる。

- I. どこかで明示している場合
- II. 明らかに受け手が理解可能な場合

これらの場合は「省略」ができる。この説明を「省略の基本的な考え方」として最初に解説し、分詞構文の副詞節をパラフレーズするケースの教授法を次に考えていく。

3.3 「省略」と分詞構文の教授法

2.2で典型的な分詞構文の3つのステップ教授法に関して、これらのステップを「覚えて」作文をさせるような指導傾向が強いことが課題であることをあげた。単に省略ができることを指導するよりも、「省略」をすることでも「示す」ことが理解できれば質的学習に転換できると考える。3.2であげたように、「省略の基本的な考え方」をI、IIのようにわけて押さえてもらいながら、指導の展開を考えてみる。先にあげた例文をそのまま使用してみる。

When one of my friends saw me, he ran away.

ここでまず I の場合、つまりどこかで明示している場合、分詞構文においては省略ができることを考えると、

When one of my friends saw me, he ran away.

従属節であげられている主語が、主節では代名詞で「明示」されているため省略可能であることが理解できる。(上記の例文、下線部) 当然従属節では主語が名詞であげられているため、こちらを省略するならば主節の代名詞はそのまま名詞を使って明示する必要がでてくる(下記の例文、波線部)が、視覚的な情報のほうがより理解しやすいため、省略されたものをあえて残しながら書いてみると、

When ~~one of my friends~~ saw me, one of my friends ran away.

ここで非常に大切な情報をもうひとつ与える必要がある。それは、動詞sawを現在分詞seeingにかえることで本来従属節では表されていた時制を示すことができない。この点を理解してもらうことである。しかしながら、この時制においても実は主節の動詞ranの部分で過去形であることが「明示」されていることに気がつけば(むろん、ここでも「基本的な省略の考え方 I」)に注意して学習者に発問しながらその答えを導き出すことも留意したい。) 現在分詞seeingに過去の時制が内包される発見ができるのではないか。さらに II の場合、明らかに受け手が理解可能な場合を考えると、従属節と主節のつながりが文脈上判断に困らないため接続詞も省略が可能になることが分詞構文における利点、ここでは先にあげた経済性とながらこの構文の存在意義まで理解できるようになると考える。まとめてみると、

When ~~one of my friends~~ *saw* me, one of my friends ran away.

When ~~one of my friends~~ *Seeing* me, one of my friends ran away.

確かに手順自体は典型的な 3 ステップの解説とあまり変わらないが、省略する部分において理由付けをすることで「覚える」というよりむしろ「理解する」部分に重きをおくことができ、「忘れ

た」という事態も起こりにくいものになるはずである。なにより「覚える」情報ではないことが伝えられるだけでも、学習者の負担の軽減につながる。またここであげた「省略の基本的な考え方」は、特に分詞構文においてにしか当てはめられない考え方ではなく、他の文法解説でも利用できる。さらには日本語自体にも備わっているものなので、その意味でも有効な方法ではないだろうか。この考え方を最初に押えてもらうと、従属節が受動態になっているケース、また接続詞が現れるケースや、独立分詞構文などにも当てはめることができる。例えば従属節が受動態であるケースを考えてみる。

As the book is written in plain English, it is easy to understand for beginners.

これまであげてきたように、省略可能な考え方 I と II を当てはめて従属節の主語、そして接続詞を省略し従属節のisを現在分詞beingにする。そのbeing自体明示する必要があるか否かを考えてもらえれば省略可能であることがわかる。

As ~~the book~~ Being written in plain English, the book is easy to understand for beginners.

Being Written in plain English, the book is easy to understand for beginners.

ただし、この従属節が進行形受動態の場合、「明らかに受け手が理解可能」になる事態が発生しにくい状況がでてくるため省略はしないほうがよいことがわかるようになる。従属節と主節の主語が異なる独立分詞構文や接続詞が現れるケースにおいても、受け手に混乱をまねかない様に省略はせずに明示しておくことは同様の考え方ができ、応用とまではいかない解説にいたることが可能になる。江藤は分詞構文のエッセンスとして、「分詞構文は、2つのことが『同時に起こっている』、あるいは『続いて起こる』ことを表す。」(2015, 117) としており、このようなシンプルな解説も初級レベルの学習者には情報量を減らして有効に理解させるひとつの方法ではないだろうか。

4. おわりに

これまで分詞構文の教授法において、副詞節をパラフレーズするタイプを、「省略の基本的な考え方」を最初に指導することで、量的な学習ではなく質的な学習へ転換できるよう考察してきた。むろんこの構文に関して様々な議論がなされてきたことを無視して、この教授法がベストなものであるというスタンスで考察してきたわけではない。分詞構文の中には、形の上ではあっているようなものでも、意味上容認されないようなものも出てくるため、これだけでは初級レベルの学習者がさらに深い理解を求め、この構文を使ってさらに豊かな表現をするための情報は不足している。また、外国語の修得に限らず、「学び」に必要なことは反復することや積み上げていくことも確かなことである。ただ、覚えるだけの学習や情報を削ぎ落としすぎて学習者に理解したつもりには仕向けるような偏った教授法は指導にあたるものとしては避けなければならない。そのバランスを保ち、より効果的な教授法が増やせるよう現状「典型」とされているものにも、もう少しだけ踏み込んで「覚えなければならない」情報をできる限り減らしてあげる、つまり量的学習を質的学習へ導く可能性を感じ、ひとつの方法として提案した次第である。

Review』, 31, Osaka University Knowledge Archive

武田修一, 2016, 『教育英語意味論への誘い』, 開拓社

【引用資料】

- 江藤裕之, 2015, 『英文法のエッセンス』, 大修館書店, p.93, 117
 小野隆啓, 2015, 『英語の素朴な疑問から本質へ』, 開拓社, p.120
 尹盛熙, 2016, 「省略現象の対象分析に向けて：現状と今後の課題」『国際学研究』, 5(1), p. 121

【参考文献】

- 安藤貞雄, 2005, 『現代英文法講義』, 開拓社
 植山恭男, 2016, 『機能・視点から考える英語のからくり』, 開拓社
 加賀信広・大橋一人, 2017, 『授業力アップのための一歩進んだ英文法』, 開拓社
 久野暲・高見健一, 2017, 『謎解き英文法 動詞』, くろしお出版
 瀬戸賢一・山添秀剛・小田希望, 2017, 『解いて学ぶ認知構文論』, 大修館書店
 早瀬尚子, 1992, 「分詞構文におけるFigure/Ground性についての一考察」『Osaka Literary

